

人の噂は千里を駆ける、とはよく言ったもの。それが女子校ならば尚のこと。突然やってきた研修員と、校内で知らぬ者はないとまで言われる美少女。そんな二人が密会を重ねているらしい……との噂が、校内に広がっているようだ。噂故か、「密会」というのは多少語弊はあるが、しかし二人きりで会っているのは事実で、それを目撃している者も少なからずいる。ならばその事実には様々な尾ヒレが付いて広まったとしても、それ自体に疑問を感じることはない。

疑問は感じないが、噂が広まっている事実を知ったとき、大上の額には嫌な汗が流れ始めていた。

「それも大上神父の仕事なのでしょうが……一応、説明していただいただけませんか？」

大上は四方と二人きりになった職員室で、突然問い詰められ焦っている。

まさか四方が噂を聞きつけ、彼女から問い詰められることになるとは、大上は全く予測していなかった。いや冷静に考えれば充分にあり得る話なのだが、当人である大上は、異性であるとはいえ数多くいる在学生の一人と普通に面会しているだけでここまで噂になるとは考えにも及ばないことだったから。自分が、そして月原が、どれだけ目立つ存在なのかということ、本人達が一番自覚していないのだ。

「や……その、やましいことはしてませんよ、ホントに……」

少女と二人きりで密会。それを問い詰められるということは、何を疑われているということなのか……半ば反射的に、大上は弁明をしてしまう。だがこのような言い訳は、むしろあらぬ疑いに拍車をかけてしまいがちだ。

「そんなことは判つてますから……」

大上にとつて救いなのは、四方が彼に對しいかがわしいことをするような男ではないと信頼されていることか。しかし四方があきれ顔で溜息をついているところを見ると、大上の慌てぶりはよほど「あらぬ疑い」を招きやすい、大げさで挙動不審な態度に見えるのだろう。

「月原さんと会っているのは何故ですか？ 彼女が大上神父の探っている事件と関係があるということですか？」

大上が聖パトリック女学園に潜入する手助けをしている四方は、彼の正体も本業も当然知っている。しかし彼女は大上が何を探っているのかまでは聞いていなかった。本人が話したがない以上詮索をするつもりはなかった四方だが、四日目を迎えた今になって四方は大上の仕事に口を挟んできた。

四方が突然口を出してきたことに大上は戸惑っていた。彼女がただ好奇心で聞きたがっている訳ではないのは重々承知しているだけに、何故四方が月原に對して敏感な反応を示したのかが気になっている。

「……そうですね。その顔だと、まず私の方から説明する必要がありそうですね」

驚きと戸惑いを隠さなかった大上を見て、四方は必要以上に大上が混乱しているのを察した。そして今自分が、大上に對し興奮気味になっていることにも気づいた。熱くなっている自分の熱を息と共に吐き出し冷静さを取り戻す四方。落ち着いたところで、四方は口を開く。

「月原さんは、私達の女子修道院……ブリージット女子修道院に関わりのある女性なんです」

大上は驚かすにはいられなかった。まさか、自分が探りを入れている女性が、身近な人と浅からぬ関係があるなどどうして思えるだろうか？ しかも相手はグノーシス主義の異端教団信者。大上にとって信頼できる彼女たちブリージット女子修道院に関わりがあるなどとはとても考えつけない。

「彼女の母親が、私達の修道院に在籍していた方なんです。ですからその娘である月原恵美さんの事を、私達はずっと見守っていたのです」

なるほど、母親からの繋がりか……心が落ち着いてきた大上は、顎に手を当てながら四方の話から様々な事柄を整理していた。そういえば、母親についてはまだ一切の情報がなかったな。ここは全てを明かして情報の提供を求めるか？ むろんそれが最善であると思われるが、大上はまた躊躇した。彼女を、四方を巻き込んで良いのか？

考え込んでいる大上を見て、四方は溜息をつく。優しいが、それ故に優柔不断になりがちな彼を、四方は出来る限り見守るようにしてきたが、今回ばかりは自分が所属する修道院のためにも背中を押す必要があるとそうだ。

「あなたの悪い癖ですよ、大上神父……いえ、ケンちゃん。いつも言ってるでしょう。頼れるときに頼るのが仲間ではなくて？」

彼女にちゃん付けて、学園で普段通りに呼ばれてまで説得されては、もはや大上に躊躇など許されるはずもない。

「チャコさんにそこまで言われると敵いませんね」

そもそも大上は年上の女性に弱い。加えて付き合いの長い四方が相手では尚更。大上は意を決して、全てを話し全面的に協力を仰ぐことを決めた。

事の起りから……いかにして大上が月原と出会ったか、その下りから話し始めた大上だが、予想通り四方は月原がグノーシス主義の異端教団に関わっている事実を知り驚愕した。しかし四方はその事を詳しく聞きたいのを我慢し、大上の話を黙って聞き続けた。

四方にとって学園長に疑いが向けられているのは薄々感じていたことではあったが、彼が異端教団絡みで疑われているという話やはりショックなこと。さすがの四方も、話を聞き終えてからしばらくは状況を頭の中で整理するのにはしの時間を要した。

「そうですか……あなたがなかなか私に話しながらなかった理由がわかりましたよ」

大上にとっては学園長のことだけが気がかりであったが、月原までが四方と繋がりがあろうとは。今まで黙っていたのはある意味で正解だったが、しかし状況を考えると早く四方の協力を得ていた方が良かっただろう。自分の優柔不断さが招いた失敗に、大上は心中で苦虫を何度もかみ砕いていた。

「それで……我々は前の学園長が月原裕也という人物だったことを突き止めたんですが、彼は……」

「ええ。ご推察の通り、恵美さんのお父さんです」

やはり。そこは推測通りだったが……そうなると、月原裕也の死因について疑問が沸いてくる。そして現学園長である木宮大介との繋がりも。むろん学園に裕也のデータが残っていないことなど、いくらでも疑問は残っている。

「月原さん本人は、両親を狼男に殺されたと言っていたわけですが……チャコさんは裕也さんと彼の奥さんの死因をご存じですか？」

今度は四方が考え込む番となった。しかし結論はすぐに出る。情報の提供を一方的に促

して、自分ばかりが黙っているわけにはいかないし、なにより自分達の為にもここは協力を惜しむわけにはいかないのだから。

「事件としては、放火および強盗殺人ということになっています。死因は刃物による殺傷らしいのですが、家が全焼してしまつた際に夫妻も焼かれてしまつたようで……ハッキリとした証拠は何一つ残っていないかつたそうです」

四方の話によると、この事件はその大きさから新聞にも取り上げられているとのこと。

「この事件があつたとき、当時……九つかしら？ 恵美さんは現場近くで倒れているところを発見、保護されているわ。そして彼女は何一つ事件のことを覚えていないと証言しているのよ……」

「えっ？ ちよつと待ってください。何も覚えていない？」

明らかに矛盾している。大上が思わず話を止め疑問を口にしてしまうのは無理もない。

パパやママを殺したのはお前達だ！ 大上が初めて月原と会つたときに浴びせられた、呪いの言葉。耳にこびりついて今でもハッキリと覚えている。事件のことを全く覚えていない月原が、何故^{ウェア・ウルフ}狼男を見て敵^{かたき}だと断言したのだろうか？

「ええ……だから私も、ケンちゃんの話聞いて驚いたわ。さっきも言つたとおり、証拠は何も残っていないのに何故断言できるのかしら……」

不可解すぎる。しかし月原が嘘を言っているとはとても思えない。とすれば、何か彼女なりの確証があるのだろうか……。

「もう一つ良いですか？ 月原さんの保護者は、今誰になつているんです？」

生徒名簿にも記載されていなかった保護者。両親のいない彼女をいつたい誰が面倒見ているのだろうか？ これはいくつもある疑問の中でも特に気がかりだったこと。この答えはアツサリと四方から伝えられる。

「ブリージット女子修道院長である、シスター春川です。しかし養子縁組などは本人の希望もあつてしておりません」

なるほど、これは確かに修道院の一員として四方が月原を気にするのもうなずける。しかし納得しようとした大上に、四方は「ただ……」と言葉を繋いだ。

「実質上、今の保護者は学園長です。彼女が小学生の時までは修道院で預かっていましたが、本人が中学に上がる際、自分の父親が学園長を務めていたここ聖パトリック女学園への進学を希望したので、修道院から学園寮へと移りました。もちろんシスター春川も直接学園長にその旨を伝えてお願いしていますから……」

予測していたことだが、やはり月原と学園長に繋がりはあつた。これで学園長もグノーシス主義に属しているのは明白となつたわけだが……だからこそ、深まる謎が多々あるのも事実。

「シスター春川が月原さんを預かることになつたのは、遺言書か何かに従つてのことですか？」

ふと、学園長が遺言によつて今の役職に就いたという話を思い出し、大上は遺言書のことを尋ねた。次期学園長の事を気に掛け遺言を残しているなら、当然娘のことも何か残しているはずだと大上は睨んだ。

「遺言……ですか？ いえ、そのような話は聞いたことも……私が知らないだけかもしれません」

確かに四方が具体的な遺言の話まで知らなくても当然なのだが、大上は何か引つかかる物を感じた。

「そもそも、遺言書など残せる状況だったのか？」

事件を聞く限り、月原の両親は突然襲われ亡くなったと思われる。しかも家が全焼するような状況で遺書を書くなんて出来るはずもない。となれば、事前に用意していたことになるが……。

「月原さんのご両親は、何者かに狙われていたとか、そのような話はありませんか？」

「いえ、まったく……何も心当たりがない中で突然の事件でしたから、皆驚いておりました」

仮に四方達が知らなかっただけで本当は何者かに狙われていたとしても、遺言書を残すなら娘の事に対して一筆あるはずだろう。それが何もなく、学園長の話だけ遺言があるというのは……あまりにも不自然すぎる。いったいこれは何を意味しているのか？

大上はひとまず遺言の話を脇に置き、月原の両親について詳しく尋ねた。四方の話によると、月原の母親……月原恵理はアイルランド人のハーフで、母親、つまり月原から見て祖母がアイルランドの女子修道院の出身で、そこから代々四方達の修道院と関わってきたとのこと。また月原の髪の色が薄いのは彼女がクォーターであるかららしいが、母親は綺麗な黒髪だったらしく、髪は隔世遺伝によるところが大きいか。

父親は大変立派な人だったらしい。四方自身は母親も含め何度か見かけたことがある程度らしいが、修道院でもその人柄が伝わるほどの人物だった様子。だからこそ、修道院としては娘である恵美をしっかりと見守りたかったが……よもやグノーシス主義の、それも武闘派の異端教団に深く関与しているとは。彼女の受けたショックが計り知れないものだろうことは、大上でなくとも安易に予測できる。

「チャコさん……月原さんのことは、もうしばらく待っていてもらえませんか？」

それを承知して大上で、大上は四方へ頭を下げる。

今の段階で、四方達の修道院が介入してくるのはまずい。修道院としてはなんとしてみても月原を異端教団の信仰から目覚めさせたいだろうが、修道院が直接月原に接触し始めれば学園長がそれを察し、何らかの妨害か、あるいは根本である異端教団が追求されるまゑに雲隠れしてしまいかねない。そうなるとは異端教団の断絶を目指すカウンターハンター大上としては問題だ。

「ええ、もちろん……修道院には報告しますが、私達の介入はしばらく控えます。先ほどの遺言の話などは私の方から尋ねてみますから」

四方だって大上の立場や彼が行おうとしていることは理解している。身内同然である月原のことは心配だが、焦りは禁物。ここは大上に一任するのが適切だろう。

「助かります……絶対に月原さんは救い出して見せますから」

異端教団を信仰する月原は大上が差し伸べる手を拒むだろうが、しかし彼女がいるべき場所は異端教団ではない。信仰は自由であってしかるべきだが、はたして月原は自ら進んでグノーシス主義を信奉しているのだろうか？

大上はふと、初めて月原と出会ったときのことを思い出した。あの時彼女は、教会の清掃と「懺悔」をしていると言っていた。彼女はキリストの十字架を前に、何を懺悔していたのだろうか？ 加えて、信心深くはないと自ら発言している事への真相も気がかり。学

園に来るまでは修道院に身を寄せていたという彼女に、いったいどんな心変わりがあったのだろうか？

四方からもたらされた解決への糸口は、大上をさらなる謎へと誘^{いざな}っていく。

大上が頭をひねっている頃。天道寺もこれから頭をひねろうとするところだった。

「はい、ありがとうございます……いえいえ、こちらこそ……はい、はい、ええ、是非とも。いずれ折を見て……そうですね。はい、では失礼します……」

社交辞令で話を結び、天道寺は受話器を置き……そして眉間にしわを寄せ、一言つぶやく。

「……どうということだ？」

電話越しに話をしていたのは、聖パトリック女学園の学園長、木宮大介と親交があったという大学教授。天道寺や大上の協力者にしてスポンサーでもある有栖^{ありす}学園の理事長を通じて接触することが出来た人物。

「成果はあったようですが……その様子だと、雲行きは怪しそうですね」

天道寺のすぐ側にいた家憑^{シルキ}き妖精のメイリンが、ソファーに向かう天道寺の後をついて行きながら尋ねる。メイリンの質問にはすぐ答えることなく、天道寺はソファーに腰掛け一息ついてから口を開いた。

「色々と判明したことがあって……おかげで色んな事が判らなくなってきたよ」

天道寺が腰掛けると同時にメイリンから差し出された紅茶を一口味わう。味わうとは言っても、今の天道寺に味を楽しむ心のゆとりはなかったが。

「まるで謎かけのようですね……良かったら聞かせてもらえますか？ 人に話すことで整理できることもありますでしょうし」

むろんメイリン自身が電話の内容に関心を持っていることもあるが、彼女が言うように一度脳内を整理するためにも、謎かけとなった会話内容を口にするのは有効な手だて。天道寺は再度ティーカップを口元へ運び、唇を湿らせ円滑に語れる準備を整える。

「藤美^{フミ}の調べで、あの学園長が元々宗教学の教授だったというのは覚えてるな？ そして研究テーマがキリスト教における異教や異文化の取り込みだったのも」

もちろん覚えてるのは承知しているが、頭の整理も兼ねているため天道寺はまず話の基礎部分を口にした。

「その研究過程において、グノーシス主義の研究ももちろんしていたようなんだが……同時にオカルト方面の研究もしていたようだ」

「オカルト……ですか？」

宗教学とオカルト。見方によっては密接しているようにも受け止められるが、宗教学の方から見たオカルトは眉唾物でしかないだろう。そんなオカルトも研究対象としていると聞けば、頭上に疑問符の一つも浮き出してしまうというものだ。

「ああ……まあ確かに、グノーシスもそうだが、テンブル騎士団とかその他様々な異端^{カルト}教団はオカルト系の映画や小説なんかにはよく出てくる題材だ。研究対象として価値があるとと言えるが……」

言葉を句切りまたティーカップの縁に口を付ける天道寺。そして続く言葉を紡ぎ始める。

「特に熱心だったのが、クトゥルフ神話の研究だったらしい」

怪奇幻想作家H・P・ラヴクラフトによって創造され、後に数多の作家が参加し形成されていった架空の神話体系……それがクトゥルフ神話。今や世界中に多くのファンを持ち、一つのジャンルとして確立しているほどの人気を保っている。学園長はこのオカルトの中でも特に有名なクトゥルフ神話に興味津々だった様子。

「そもそもこのクトゥルフってのは、色んな神話を参考に作られててな。グノーシスも参考にしている節があるんだ。グノーシスで言う創世の神にして邪神であるデミウルゴスに酷似している、外なる神の創師、魔王アザトースなんてのがいたりする」

腕を組みながら、天道寺の話は続いた。

「確かにグノーシスを研究するなら、クトゥルフは面白い研究対象かもしれないが……本来のテーマはあくまで宗教学、それもキリスト教における異教や異文化の取り込みなんだとすると、クトゥルフは脱線しすぎだろう。にも関わらずあまりに熱心だったのが気になったと、さっきの教授も言っていたよ」

目を閉じ口を閉じ、天道寺はうなづいた。先ほど聞いたばかりの話を整理しようと口に出してはみたものの、やはり整理しきれない。むしろ混乱するばかり。いったい木宮という男は、七年前まで何を目的に教授という職を勤め何を目的として研究をしていたのだろうか？

「グノーシスが真の目的ならば、クトゥルフへの脱線もあながち間違いではないのでは？」

メイドの助言に、館の主はうなりながら答え、口を片手で塞ぐようにして考え込んでしまふ。

「確かにそうだ……そうなんだがな」

グノーシス主義の異端教団カルトに属し活動しているくらいなのだから、元からグノーシスを研究対象とし、表向きを偽っていたとも考えられる。しかしそれだと引つかかる物があると天道寺は感じていた。

「グノーシス自体は異端扱いされていたとはいえ、至極全うな宗教だったんだよ。グノーシス自体幾つもの宗派が存在していたり、現在でも信仰されている宗派があったりもしている。真面目な研究対象として、グノーシスはとても興味深いテーマなはずだ。なにもこここそ隠れて研究する必要はないはずなんだよ……」

それともう一つ。そう言いながら天道寺は中指を立ててみせる。

「クトゥルフの他にも超能力とか、「人知を越えた力」といった類にも興味があったらいいんだ。あくまでクトゥルフの話は学園長が興味を示したオカルトという分野の中で特に目立っていたから、さっきの教授が覚えていたに過ぎないんだ。超能力の他にも催眠術とか……ああ、催眠術に関しては他の心理学あたりの教授に話を聞きに出向いたりもしていたらしい」

むしろクトゥルフよりも催眠術の方が現実的かもしれない。話を伺った教授は非現実的なクトゥルフ神話の方が印象に残っていたのだろうが、催眠術の方が活用できるだけ不気味な話だろう。自分で口にしなから、天道寺はそう思い直した。

まあその前に、世間一般から見たら非現実的でまさにオカルトな環境にいる天道寺達が他のオカルトに対して現実的かどうかなどを論じるのもおかしい話なのだが。

「いずれにせよ、どんな目的があったのかサッパリ判らない……催眠術や超能力っての

が武闘派というところに繋がるのか？ だとしても……なんだかなあ」

頭を掻きむしってはみるが、それで天道寺にひらめきが生まれるわけでもない。やはりただうなるだけで終わってしまう。

「……もしかしたら」じつと話を聞いていたアイリンが口を開く。「私達はどこかで何か、大きな思い違いをしているのかもしれないね」

そうかもしれない。だとしたら、どこでどんな思い違いを？ 結局謎は謎のまま。天道寺もまた、大上と同じく混沌とした謎の中腹へと誘われられていた。

一番の問題は、情報のほとんどを関係者や関連書類など間接的なところから得た物ばかりだということにあるのかもしれない。聞き出せるなら、直接本人から聞きたいところだが……大上はその張本人との面会を前に、悩んでいた。

そもそも月原との面会は、学園のことを詳しく聞かせて欲しいという、研修員としての表向きな目的があつてのものだった。その目的は既にほぼ完了している。学園のことで月原から聞きたいことは、もうほとんど残っていない。

しかし月原本人のことについてはほとんど聞き出せていない。本来の目的はこちらなのだというのに。

故に大上は焦っていた。焦りながら、刻々と迫る面会でどのように話を繋ぎ引き延ばし、本来の目的を聞き出そうか……その段取りを、脳内で幾通りも計算していく。

「……お待たせしました」

しかし大上が念入りに準備した段取りなど、彼女の一言を聞いたとたん全て四散してしまった。これから始まる待ちわびながらも緊張するひととき。そして本人が自覚していない感情によつて、胸はドキドキと高鳴りはじめる。

「ああ、月原さん。お待ちしてましたよ」

所詮会話は生もの。むしろ流れの中でいかにして自分の方へ引き寄せるかが肝心なのでから、事前の準備などむしろ無用。

ハードボイルドに決めていれば流れは俺に傾く！

どこからその自信が沸くのか。心理学の権威でも解き明かせそうにない思考理念に基づき、大上は月原との会話を楽しんだ。

何度か彼女との会話を交えることで、大上は月原という少女の性格を幾分か理解し始めていた。彼女が基本的に無口なのは学園で出会ってから既に承知していたが、しかし思っていたより無口というわけではなかった。彼女は自分から話しかけることは皆無なのだが、しかし相手からの質問などには素直に答える。会話の内容も言葉数が少ないというわけでもなく、むしろ流暢だ。これを理解し、コツをつかめば、話はスムーズに進んでいく。

もう一つ。彼女はクールというよりは単に無表情であるということも把握し始めていた。会話の内容がどのような物でも、彼女は表情を変えない。大上が知る限りで彼女の顔に表情が宿ったのは……狼の姿で会った時を除けば、「信仰」の話になったときくらいだ。それだけ彼女の中で信仰の話は心を揺さぶる何かがあるという証拠にもなるが……その話に及ぶと彼女が逃げ出してしまふのは承知しているだけに、おいそれと追求は出来ない。

また無表情ではあるが、感情まで皆無だというわけではなさそうだ。例えば大上がジヨ

ークを飛ばせば、面白いですねとコメントし、苦勞話を切り出せば、大変ですねと勞ねぎらつてくれる。つまり彼女は、表情に表れない分を言葉で補うのだ。

だいが月原との会話になれてきた大上は、自然と、本人同士が意識しないほど自然と、お互いのことに踏み込んだ会話へと流れていた。

「じゃあ学園祭で飲食関係はNGなんだ」

「はい。衛生面の問題よりも、学園の校風のように……しかし生徒側は毎年どこかのクラスで許可を申請しているようです。昨年などは先輩方が「シスター喫茶」なるものをやりたいと発起されていたみたいですから」

「あはは、それはちよつと興味あるね。でも先生達が許すわけもないか」

「ええ。我が校はミツシヨンスクールですから、おいそれとそのような許可は降りないでしょう。ですが少しづつ緩和されてはいるようです」

自然な流れは、いつの間にか大上の口調を崩し始めていた。月原の方は口調こそあまり変わらないが、しかし話す量は以前に比べだいが増えている。

良い傾向だ。ふと気づいた大上は確かな感触を得ていた。

そして気づいてしまった時点で、大上はこの楽しいひとときに余計なことを思い出してしまう。

本来聞かなければならないこと。彼女が何者で、何故武闘派グノーシス主義の異端教団に参加しているのか。そしてその異端教団の目的。これを聞き出さなければならぬ。

どうやって？ 会話は自然と流れている。この流れに本来の目的をかぶせれば、流れは強引に変わり不自然になる。流れが完全に止まってしまふ恐れだつてある。どうやって気付かれないように流れを本流へと引き寄せるか……そんなことを頭の片隅で考え始めてしまった段階で、大上の話に滞とどまりが生じてしまうのも止むを得ないだろう。

「……あの、大上神父……」

その滞りが生み出してしまった、会話と会話の間。一瞬の沈黙。それは話が切り替わる、大上にとってチャンスにもピンチにもなり得た瞬間だつた。大上はその刹那で主導権を月原に奪われてしまった。自分から語ることの少ない、月原に。

「ん？」

戸惑いながらも、大上は月原の言葉を待った。そして先ほどよりも長い沈黙。ついに月原の唇はまた動き始めた。

「私……私の話を、聞いてもらつて良いですか？」

来た！ 大上は待ちわびた言葉に心中で小躍りする。よもや彼女の方から話を振つてくるとは思わなかったが、これは間違いなく、これまで大上が「悩みがあるなら打ち明けて欲しい」と言い続けたその成果が実つた瞬間だろうと、彼は確信した。

そしてそれは、まさにその通りとなる。

「ええもちろん。私で良ければ」

折角崩れた口調を、緊張のためか戻してしまう大上。むろんそんな小さな変化に二人とも気を詰めることはなかったが。

「……私は、信心深くありません。神様を、信じていません……」

月原にしてみれば、大上の前で見せてしまった不振な言動。その事への言い訳も含まれていた。むろん彼女にとってこれが、心の中にあるわだかまりで、誰かに聞いて欲しかった。

た話なのと言うまでもない。

「私は両親を……その、亡くしています」

さすがに殺された、とは言えない月原。前振りもない突然の告白に、普通ならば少しばかりは動揺する言葉だろう。しかし既に月原の両親のことを聞いている大上は驚きもせず、平然と聞き続けた。大上の態度に不信感を持つことなく、いやむしろ堂々としていることで安心感すら芽生えた月原は、言葉の続きを紡ぎ出す。

「もし神様がいるなら……何故両親は死ななければならなかったのでしょうか？ ある人は……これは神様が私に与えた試験なのだと、そう言いました」

そのある人とは学園長だろうか？ それとも四方達修道院の誰かだろうか？ ふと大上の中で思いついた疑問ではあったが、大上は黙って月原の話聞き続けた。

「でもそんな試験に、何の意味があるのでしょうか？ これが試験なのだとしたら、私のために両親は……死んでしまったというのですか？ それはあまりにも……酷すぎます」

辛い話に、それでも月原は表情を変えることはなかった。だが、雰囲気というべきか、彼女から悲しみの感情が流れ出ていることを、大上は察していた。

「そんな私なのに、私は神様に……神様を信じる人達に助けられています。それが、辛いです」

なるほど。大上は納得していた。おそらくそんな彼女の心情が懺悔ざんげの祈りや奉仕活動という、神への埋め合わせに繋がっているのだろう。しかしそれらの行為は周囲の人々には信心深い人と映るはず。そのギャップが、彼女に信仰という言葉への拒絶を生んでしまっているのではなからうか。そう大上は推測し……そしておそらくこの推測に間違いはなさそうだ。もしかしたら他にも何か要因があるかもしれないが、しかし今は、この大きな収穫に感謝し、同時に、なんと言葉を返せば良いのか……大上は悩んだ。

「人は一人では生きていけない……それは信仰や宗教といった枠を超越した、真実です」まるで本物の神父にでもなったかのように、大上は自身の考えを本人が驚くほど流暢りゅうちやうに語り出した。

「困っている人がいるなら手を差し伸べる。それは神様の教えと関係なく、人が人として持ち得る優しさだと思います」

形などに差はあれど、優しさは神への信仰などなくても誰もが持ち得ているもの。現に今無信仰者の大上が月原に手を差し伸べているのがその証。

「困っている月原さんに差し伸べられた手は、皆人としての優しさで、それは信仰や宗教とは関係なく、甘えて良い物だと思えますよ」

むしろその優しさに宗教を絡めるのはいかなものか。神を信じない大上はそう思う。もしかしたら彼女は……差し伸べられた優しさに絡められた、異端教団カトリックへの誘惑に誘われてしまっているのかもしれない。そう結論づけるには性急だが、原因に一部にはあるかもしれない……そう大上は感じ取った。

「あなたもクラスメイトを手伝ったり、私に色々と学園のことを教えてくれたのは、神の教えに従ったことですか？ 違うでしょう？ あなたの優しさがしてくれたものと、私は感じていますよ」

大上の話を黙って聞き続けている月原に、外見的变化は見られない。しかし彼女から発せられる雰囲気や和らいだ。確証的な物など何もないが、大上はそう感じ取っている。

「優しさを受け、それに恩義を感じることは正しいことだと思います。しかしそこに信仰や思想を織り交せるのは間違っています。もしそれを強要するならば……それは初めから、優しさなんかではありません」

下劣な悪巧みに他ならない。さすがにここまで言葉にしなかったが、自分の言葉に自分で納得し、勝手に憤りを感じる大上がそこにいた。

月原と彼女が関わってしまったグノーシス主義の教団はさておき……昨今日本で乱立する異端教団には、優しさに見せかけた卑劣な勧誘が多い。心の弱った人を見つけてはその弱みにつけ入り、信仰をすり込んでしまふ異端教団のなんと多いことか。そうして騙されていく弱った人々は金品などを搾り取られ更に弱っていく。自覚無しに。

月原も弱みに付け入れられた一人だろう。しかし彼女はこうして助けを求めている。彼女にその自覚があるかどうかはさておき。ならば助け出さなければ……大上は決意を新たにしていた。

「神様を信じる人達に助けられているとしても、それを信仰という形で返す必要はありません。人として、あなたが健やかに育ってくれることが、そのまま優しい人達への恩返しになりますよ。それを何よりも、その人達は望んでいるはずですよ」

少なくとも、四方達修道院の人々は。それは間違いない。彼女たちはそういう優しい人達だから。

「……そうですね……そうですね……」

つぶやきながら、月原は気持ちの整理を始めていた。

大上の言うことはもつともで、理解できる話だ。しかしだからといって、これまで抱えていたわだかまりがそう簡単に全て無くなるとはいかない。しかし戸惑いながらも気持ちが軽くなっているのも事実で、月原はそれを自覚していた。

そして彼女の中で、大上という男に対するある種の感情が大きくなることも、鼓動の高まりと共に自覚している。

それが信頼なのか尊敬なのか、それとも……もつと別の、特別な……何かなのか。そこまで自覚することは叶わなかったが。

「私、あまり人と話をするのが無いのですが……大上神父と話をしていると、とても楽しいです」

これが彼女の、率直な感想。文脈としては先ほどまでの会話から考えて少々妙なところはあるが……表情のない彼女の、精一杯の笑顔を代弁している言葉なのだと、少なくとも大上はそう感じていた。

そもそも月原は級友とも会話することも珍しく、座談や相談など皆無に等しい彼女にしてみれば、年の近い異性とこれだけ会話を弾ませ悩みを打ち明けること自体奇跡に近い。むしろ月原自身はそんなこと微塵も考えてはいないだろうし、大上もただただ自分が続けてきた努力が報われ始めている事へ対し胸をなで下ろすのに精一杯だろうが。

「そうですね。そういつていただけだと、私も嬉しいですよ」

月原に代わって、大上は満面の笑みを、心からの笑みを浮かべる。彼にしてみれば、カウターハンターとしても一人の男としても、今日の会話は有意義だったのだから。

「それで、あの……」

しかし直後に、彼女は少々戸惑った言葉を口にし始める。

「すみません。明日は……私用があつてこちらには来られないのですが……」

本来の目的……大上が学園の様子を月原から聞くという大義名分はとうに終えている。それでも月原は、たった数日の間で礼拝堂へ大上を訪ねに来ることが「習慣」になっていた。だからだろうか、月原は来なくても良い面会に来られないことを謝罪している。

「ええ、お構いなく。またお暇なときにでも来てください。お待ちしますよ」

大上の言葉を受け、月原は一礼した後に教会を出て行った。

月原を見送り一人になった大上は、今日の成果を噛みしめる……ことも無く、既に明日の事へと思いを馳せていた。

月原が明日来ないだろう事は予測済みだった。今日の正否にかかわらず、来ないだろうと確信していた。

明日二人は、教会で会うことはない。しかし別の場所、別の時刻、別の姿で会うことになるだろう。

満月が、二人を待っている……。